大正2(1913)年

夜の浪

水野仙子

どちらから誘ひ合ふともなく、二人は夕方の散歩にと二階を下りた。嫂が並べた草履の目に喰ひ入つて居た砂が、聰くなつて居る拇指の裏に濕りを帶びて感じられた。

『いつてらつしやいまし』と板の間に手をつく聲が、暫く後を見送つて居ること丶、肩のあたりにこそばゆい思ひをしながら、あの女にも嫉妬を持つと民子は自分の胸のうちを考へた。綺麗な女ではない、けれどもその溫順しさと、少くも自分が此處に來るまでの幾日間を、心にかけて朝晩の世話をしたといふことに――それは都で受取つた手紙の中に書き挿まれてあつた――嫉妬らしい思ひが湧くのである。明日は馬鹿らしいこの思ひに、愚かしい懸念の輪を一つ〳〵懸けながら此處を離れ行かなければならない――と思ふと、低首れ氣味に一足二足後れて行く民子の前に白絣の胴を締めた白縮緬の帶の先が搖れつ丶あつた。

先の草履の音の行くまゝに民子は從つた。草の根に縋つて僅かな崖を攀ぢる時、默つて握つたまゝ渡されるまゝに、默つてその手の溫みの殘つた草の根を握つた。さうして小高い丘に立つた時、ふと振りかへつた通りに民子も亦た振りかへつた。遙かに低く見える宿の二階の二人の部屋に、窓のカーテンが白く二人の目を捕へた。その小窓に倚りかゝつて、二人が見合はした或時の目の微笑みを思つた時、民子の胸は再びその味はひを經驗した。

岬の中腹を低く高く導いて行く小道に、一つ二つ河原撫子のいたいけなのが叢の中に咲いて居た。いつもならば大袈裟な表情の聲をあげて、危かしいところならば摘んでも貰ふものを、民子はたゞ認めるだけの目を注いで過ぎた。

世間を忘れて明した今朝も、晴々しい朝の氣に猶幾日かの樂しい夢が續くのを占つた甲斐もなく、午前の便で着いた姉からの手紙を披いて讀んで行くうちに、民子は間もなく此處を去らなければならないことを覺悟した。二人の上に就いて、たゞ一人の同情者である姉は、中一日を置いて歸國の旨を言ひ送つて來たのであつた。それには民子を伴ふことに就いては一言も書き及ぼしてなかつたけれど、姉のみ歸つた時の母の失望と疑惑を思つては、民子はどうしても直ぐに此處を去らなければならないと思つた。それに今度の深い〳〵決心を持つて歸國するには、助言の爲めに姉の感情も考へなければならなかつた。しかしそれはあまりに殘り惜しいもの悲しい別れである爲めに、民子は歸るといふことに就いてはまだ一言も言ひ出さなかつた。

あらゆるものを彈いてたゞ二人が二人の息をして居た日は、僅かではあるが尊いものであつた一瞬きにも、その唇の微かな慄えにも、二人にのみ働く神經が、どうして一つの胸にばかり思ひの宿るのを見逃して置かう。民子の考へは男の思ひであつた。

たとへ二人は間もなく二人の生活をはじめるのであるとしても、それはまたある時のことであつて、現在の滿足を失ふ悲しみには、漸く見出すほどの慰藉に過ぎないのである。四つづゝついた砂の足跡も明日からは淋しく二つ殘るであらう。涙に、砂に、それとない告別の目が民子の顏色を沈ませた。その顏色がまた男の顏色であつた。

自分の心を悟つて居る男の心をまた悟つて、その沈默を破るのを怖れるやうに、民子はやはりいつまでも默つて蹤いて行つた。潮風は一足毎に岬の鼻に近づくに從つて濕りを加へて來た。耳に馴れた浪の音は次第々々にその度を高くして行く。ふと民子は立止つた。それは導く歩みがひたと其處に止つたからで、白絣の袂の下に跼んで、一人の媼が何やら摘み取つては籠の中に投げ入れてるのが見えた。

二人が其處に立止つたので、媼は體を崖の方に寄せて背をそばめて道を開けやうとした。けれども二人は暫く其處に立つて、ぽき〳〵と音をたてゝ摘まれる草の手元を見入つた。

『おばあさん、なんだいその草は？』と初めて男によつて口が開かれた。

『これかね、これあ濱菊つてまさあ。』

『なんするんだらう？』

それは獨り言ともつかず言ひ出された言葉であつた。

『土用の牛の日にね、これを摘んでゝね、風呂にたてゝ這入ると、リウマチなんぞにそりあよく利くんでさ。此處らの奴どもあ誰もこんな有難いこと知りやあがらねえんさ、ほんに勿體ねえこんなにどつさりあるものをさ。』

媼はぶつ〳〵と呟くやうに言ひながら、貪るやうにぽき〳〵とその有難い藥草を折り溜めた。投げ入れられる草は、籠の中に氣の故ほどの萎れを見せて積み込まれた。

二人はやがてまた默つて歩き出した。岬の頂きには待ち構へたやうな潮風が、はら〳〵と浴衣の袂を弄んだ。南上總の海は靜寂のうちに徐々として黑みを加へつゝあつた。斷崖の先に打込まれた幾本かの杭に引いた針金の緩みが、搖ぐほどに時たま風は強く吹きあげる。

『あの船は歸るんでせうか行くんでせうか？』

民子は徐かにその杭の一つに摑まりながら言つた。

遙かの沖に一つ小鳥のとまつたやうに、じつとして居る船は、少しづゝ動くやうでもあればまた動かぬものゝやうにも見えた。

『さあ』

暫くして男は言つた。

『今時分出て行く船もあるまいから、そのへんで漁でもしてるのだらう。でらん、じつとしてるぢやないか。』

はら〳〵と鬢の毛が頰を撫でる。

空と海との境は紛るゝほどになつた。たゞ下にはちら〳〵閃くものが走り、上には雲らしいものが微かに薄く漂ふのである。

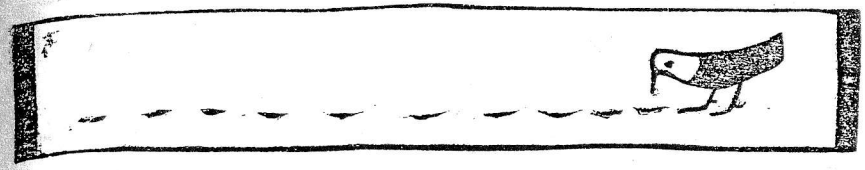
『まだ動きませんね、あの船は。』

『……』

民子はふと顏を仰ぎ見た。

悲しみを包んだ男性の沈默、その目は暮れ行く浪の面に動かず注がれて沈んだ。民子の胸には言ひやうのない感激が哀しさを誘つて流れた。

『民さん。』



『え？』

『明日歸る積りなんだらう？』

『……』

『ね？』

『えゝ。』

此時矢のやうに走つたいとしさが民子の胸を戰慄した。それは生れて二十二年を經て初めて湧く情緒である。

『この人が？……、この人が？……』と思つて、つくゞく親しくその顏を眺められた朝から、思ひもかけぬ感情の働きが民子の心を支配した。これがわが言ふことであらうかと思はれるやうな潤ひのある言葉も、體の曲線のうねりも、少女の持つ寶としてそれは戀の鍵によつて開かれたのである。

『ぢやあね、九月を待つてるよ。ね、九月になつたら必度出て來なけりあいけないよ。何も彼も民さんの決心一つなんだから……』

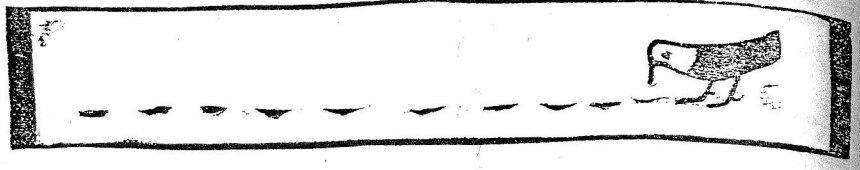
民子は默つて合點をした。包むやうな男の胸の匂ひが、ふと記憶を掠めて消えた。

『もう歸らう！だんゞゝ暗くなつて來た！』

その聲に慴えたやうに民子は起ち立つた。

『あら！あの船はまだじつとしてますよ！』

思ひもかけなかつたやうな驚異の言葉は、ふと出てその半ばを潮風に攫はれて行つた。



船の影は黑くなつて死んだやうに靜止して居る。浪といふ浪はすつかりそれ自身のうちに薄い闇を吸ひ取つて居た。

簾戸を洩れる灯の影が、涼しく緣側を越えて庇の屋根瓦にその末を投げて居る。紙を走るペンの音が、その明るい灯の中から聞えた。民子の姉に齎す手紙が、男によつて一心に書かれつゝあるのであつた。なんとはない溜息が一ぱいに詰つたやうな胸を抱へて、民子は先刻から廊下に出て居た、欄干といはず柱といはず、潮氣を含んでしとゞになつた不氣味さも、海の宿の思ひ出の一つと明日からはなるのであらう。

直ぐ目の下の入江に寄せる夜の浪は、月のないのに焦れる腹立しさのやうに、どゞどゞうと岩に碎けてはざあと勢ひ込んで引いて行く、僅かに波頭の光るのが、碎けては黑い浪の畦に白い飛沫となつて散つた。果てもなく續く濤の音は、幾千年の昔から幾らの年の未來に渡つてその響きを傳へるのであらう？小さなる人間の肉體や、精神や、思想やを無視して、絕對の無に動いて居る濤には怨恨もなく、愛惜もなく、故意もなく、偶意もない譯であつた。弄ぶでもなく、運ぶでもなくに運ばれた一つの物體が、何處かの果てに漂ひ寄つたとしても、其處に人間の發見の目がなかつたならば、それは偶然とも言へないのである。藻の一房の漂ひも、杭一本の漂着も、たゞ人間の考へによつて意義をつけられるのであつた。おゝ大自然よ！

ふと民子の胸にはある不安が萠した。海草の漂ひ寄つたにも等しい自分のこの一週日ばかりの生活が、この無心に雄大な浪に再び根を誘はれるやうな機會が、明日の別れではないかと思つた

時にであつた。――と思ふと、二日ばかり前に、慰み半分に寫眞を撮影して居る貝細工屋の主人を招んで、二人が樂しい生活の紀念にと、ある夕方岩の上と下とに立つて撮らせた寫眞が、時刻が遲かつた爲めに駄目だつたと言つて來たことを思ひ出して、その薄ぼんやりとした映像を目の當り見るやうな氣がしながら、それが何かの凶い兆でもあるかのやうに思ひなされるのであつたことく〳〵と簾戸を搖る潮風と、絶え間ない濤聲に、はた〳〵と廊下を行く草履の音を空聞きして、民子はまたしてもふとあの可憐な溫順しい婢のことなども思ひやつた。

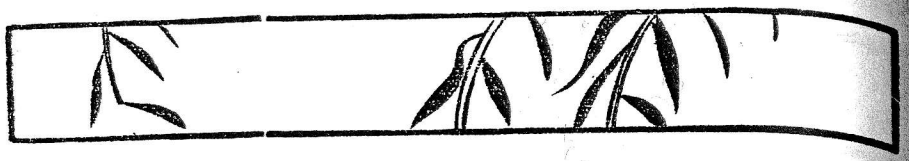
ペンの音は猶續いて居る。

夜の涙は寄せて碎けて、引いて散つてまた搖れた。それはいつまでも〳〵止まぬ活動であつた。

折れふに

知りがたし君が心の動くとき如何なることの我に起るや
たやすしとのたまふことのむづかしき世をば一つと知りしかなしさ
今ははやたゞある我と思へるに面影見えて涙流るゝ
うつろよりうつろに入るに似たれども出でゝ仰ぎぬ水色の空
君が今除かんとする水色の幕に心のくらみたる人
生るゝはすべてみにくし死ぬるこそ美しきなれ人の世なれば
一しづく熱き涙をたまはれと言ふをはゞかり吸はれたる口
痩せし身のいたづらにして寂しくば君が血しほを君にそゝがむ

三ケ島よし子



執着

山田たづ子

お柳は闇に消えて行くガッシリした後姿を、ぼんやりと胸の中にはまだ甘い夢を見續けながら見送つてゐたが、ふと踵を返さうとした時に、角の洋品店の大鏡にぱつと自分の姿が――降るやうな瓦斯の火の中に、青白いてそげた頰に煩く後れ毛の亂れかゝつた、恐ろしく老けて見える姿が、どんよりと映し出されてゐるのを見た。往來は織るがやうな中なり、先刻からじつと自分に好奇の瞳を注いでゐた店員の手前にも、再び見返しはしなかつたが、其咄嗟に今迄のふつくらとしたほのかな匂ひに浸つてゐるやうな物柔らかな情緒が消えて了つて、急に全身に涙の滲み渡るやうな氣持がして來た。

彼女の以前は花瓣のやうにみづ〳〵しかつた皮膚も今はもうその芳烈な何ものゝ魂をも溶さずには置かないと云つたやうな、強い香が薄れて了つて、いつか長い間の疲勞が、其面影に何處となく寂しい影を刻むやうにもなつたのである。事毎に觸れては激しく沸騰した鮮紅な感情もいつか古血のやうにどろ〳〵と黑ずんで了つて、もう何事に對しても少しも死身になれない、投げやりな氣怠るい氣分が、彼女の心をも髓をも犯して了つてゐるのであつた。彼女はもう此頃は終始全身に滲み渡るやうな哀愁に浸されてゐる。自分の衰へた影の寂しい姿がじつと眼に沁み着いて離れない――蔬が黑ずんで、もう疲勞が全身に沁み通つて、吐く息もあえぎあえぎ、そよとの風にも得絶えずに